

繪本
田村物語

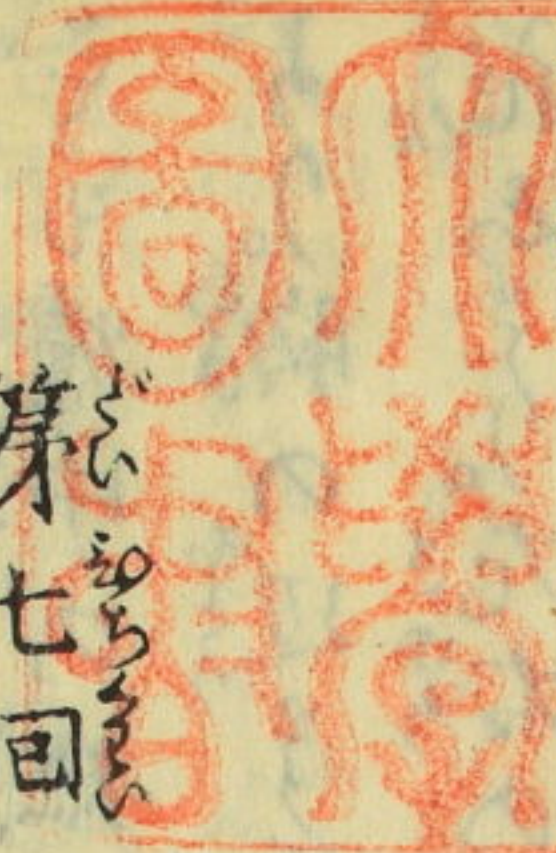
四

~ 13
3300
4



門へは
3309
4

復讐 奇説 田村物語 卷之四



大正十年八月
本大學出版部

第七回 惡報の緒

武關 川上 魁 老人 編輯
下流 梅梢軒 關旭 訂正

諸君、勢州鈴鹿郡鈴鹿山といふ坂路八町九七曲ありて、
一名と多津加美坂といふ。伊勢近江二州の堺、
ありて極く山深し。麓を鈴鹿川、
未と筆捨山の阿小續けり。此頃を益々物凄く。山賊ども此
山を寨以據り、行人を惱せざるべし。人跡絶て稀なる人も
十人二十人連を待得く往來せしむれとぞ。然れ亦刑部太郎ハ此
山踏を夜を込て一人過りぬる而已。瘴疾のうつり打惱こるる

田村物語 卷之四

を伴の山賊ども捕へて鈴鹿山の寨に連りて早夜にの
 ぐと明くお目大勢の賊ども討りて何とて今朝に冷人も遅かり
 と。将夫なる人のいふに、我討りて連りて同ふに人の賊の膏
 より手足を冷かすなり。寒さの耐がたぬ物をも云ふ山賊も
 やいなや早くも柴折らざる我先と。或は松の樹のごとく延
 てわらわち又ハ獸のごとく股打廣げまなう火近ふありて場り
 るとせし折ら。鐵權二とさうと差くばし松の枝に躡りて
 ぞも爐中の燃火八方へ散る。時なるう刑部太郎が襟の口より
 より胸の辺まで件の燃火に措かけらば大に駭き四五尺をうま
 飛あがり。尤右の手は火を打拂ひし。襟に入らぬ火の傾ありて
 かく穴立つ居る頻に苦しみたれ間も漸火を消ねと云ゆると

不意瘡疾を忘し始りて後のとんれ如し刑部太郎の跡は公中
 小あひうれは。とわらばも速小病の愈とる。今我力以て彼等
 の小賊を五十人百人以上打殺さん。易いこと。予竟我為あま
 ぞ。不如彼も屈伏せよ。今日より此山陣の魁首とならん。其
 中へ小力次費さんより大に勝たり。公は點頭と。竊小妖術の
 印を結びてまうれ時。ふしとや一采の黒雲奔下り。彩端を繞る
 と。えくしが忽席上へ更中尺をふる。と。冥くとして混沌未だ
 ぞ。えくふり。衆賊大に驚馬た。そのも後うらうらうと迷ふ
 中も此山の魁首とれ者三人あり。其一は鐵權二は二の魁首
 眼を其の鐵軍太りけら。鐵權二は大き音のつと。いこと
 時昔夜捕へたりし旅人の先火を打とれ。不計祝融神の助



岩岸刑部太
鈴鹿山
衆賊を
伏せ

日本物語卷之四



刑部太

日本物語卷之四

を得て、頃、痛を忘とて、是ホの妖術を以て、身を遁入とするも、
 ざし、いづく大勢あり、つと速に打殺せと罵り、鬼首、眼、鏡、軍太
 も、声、お、應、じて、突、鐵、が、察、み、洩、れ、夫、組、伏、し、打、居、よ、と、呼、り、ま、は、ら
 賊、一、度、み、お、ほ、う、と、爰、お、組、つ、と、彼、方、に、投、と、目、刺、も、あ、ら、ぬ、真、の
 闇、の、お、同、士、打、め、ら、ら、合、せ、く、儼、の、掾、め、の、弱、腰、く、れ、此、方、の、柱、を
 天、帝、を、打、つ、或、ハ、陰、囊、に、あ、ら、う、痛、め、と、ぐ、り、轉、り、仰、向、に、逃、出、
 踵、お、踏、ら、れ、又、し、て、起、立、鼻、に、倒、れ、聲、た、な、が、り、壺、中、の、蛙、の、如、く、
 暫、時、騷、動、中、ま、は、り、は、し、て、刑、部、太、郎、ハ、梁、木、に、登、り、て、足、成、入、る、お、お
 の、一、笑、を、催、し、た、れ、が、時、分、は、し、と、梁、木、を、下、り、て、件、の、妖、法、に、納
 早、く、も、椽、先、お、め、り、た、れ、橋、柱、に、刊、は、し、た、れ、水、鉢、に、引、絞、て、目
 よ、り、も、高、く、は、し、上、て、お、お、お、消、失、て、看、く、お、れ、バ、大、の、男、の、眼、を

怒、一、件、の、石、に、捧、し、ま、よ、と、實、章、駈、天、の、荒、ら、る、如、く、又、も、驚、く、斗、り
 な、れ、が、其、時、刑、部、太、郎、ハ、大、音、に、汝、等、今、よ、り、我、を、ま、く、魁、首、と、せ、と、
 命、以、助、け、俱、お、め、の、安、樂、を、討、と、し、看、我、力、を、ま、い、此、如、し、と、持
 と、れ、石、を、荒、ら、子、の、土、お、め、い、や、と、投、附、し、地、中、お、入、り、と、四、尺、研
 じ、響、音、も、お、め、し、け、し、是、以、て、鐵、を、始、衆、賊、踏、み、及、手、と、は、り、く、
 頭、を、地、お、つ、け、お、く、今、よ、り、我、お、頭、と、な、り、お、ひ、て、此、山、陣、を、守
 た、ま、へ、誠、お、君、お、め、も、人、間、お、め、て、非、じ、と、且、も、驚、お、れ、う、ら、ん、恐、懼、て、各
 心、伏、お、し、う、り、け、し、其、付、刑、部、太、郎、ハ、打、笑、り、て、我、ハ、章、駈、天、刑、部、に
 い、お、考、お、り、今、よ、り、心、を、傾、け、て、我、お、後、お、お、し、と、有、た、れ、バ、衆、賊、始
 り、安、堵、の、お、ひ、を、お、し、大、お、悅、び、我、等、よ、う、魁、首、以、得、と、此、山、長
 小、繁、茂、お、お、し、と、急、ぎ、猪、鹿、を、羹、と、し、大、お、酒、宴、を、お、お、り、

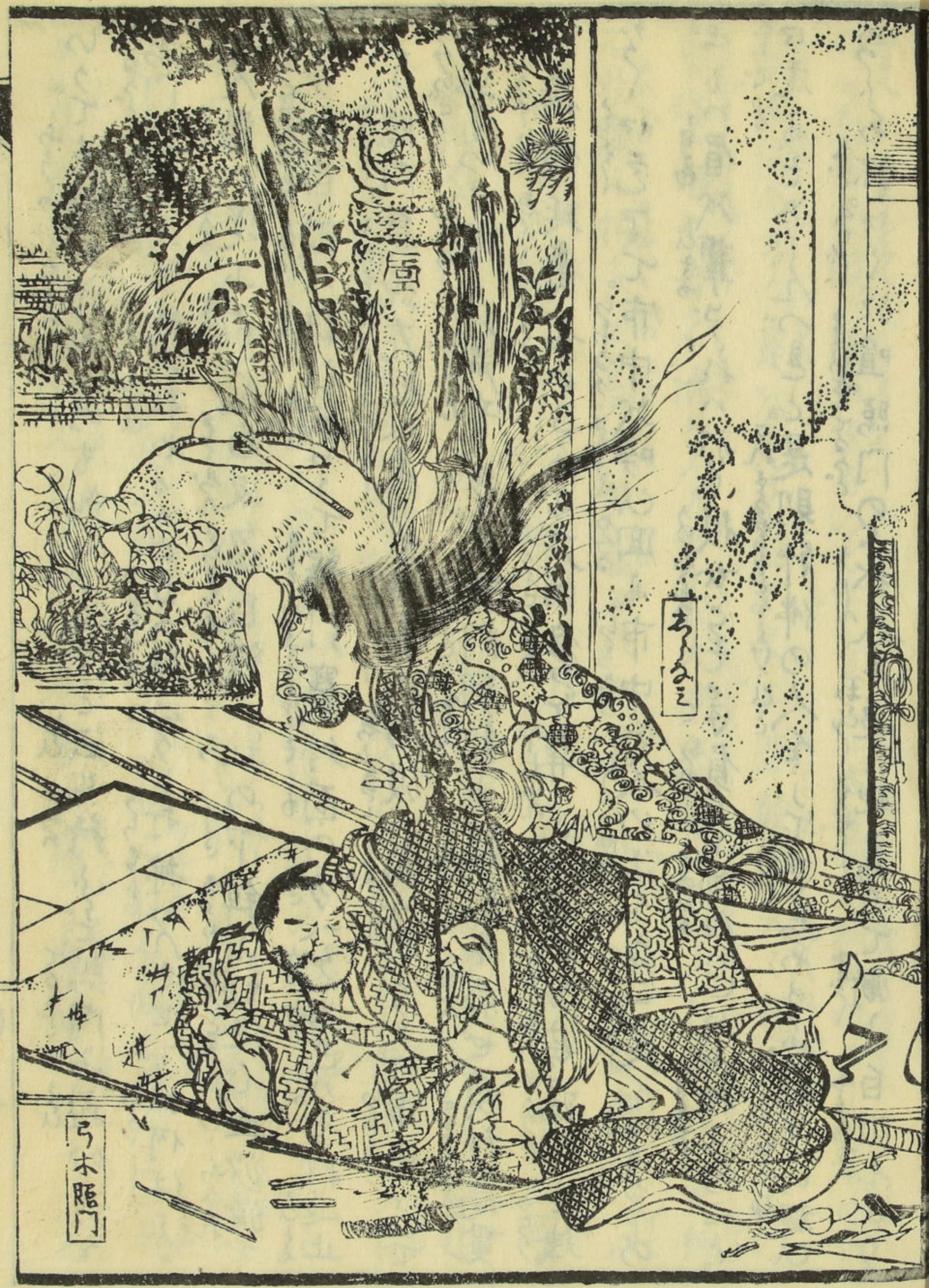
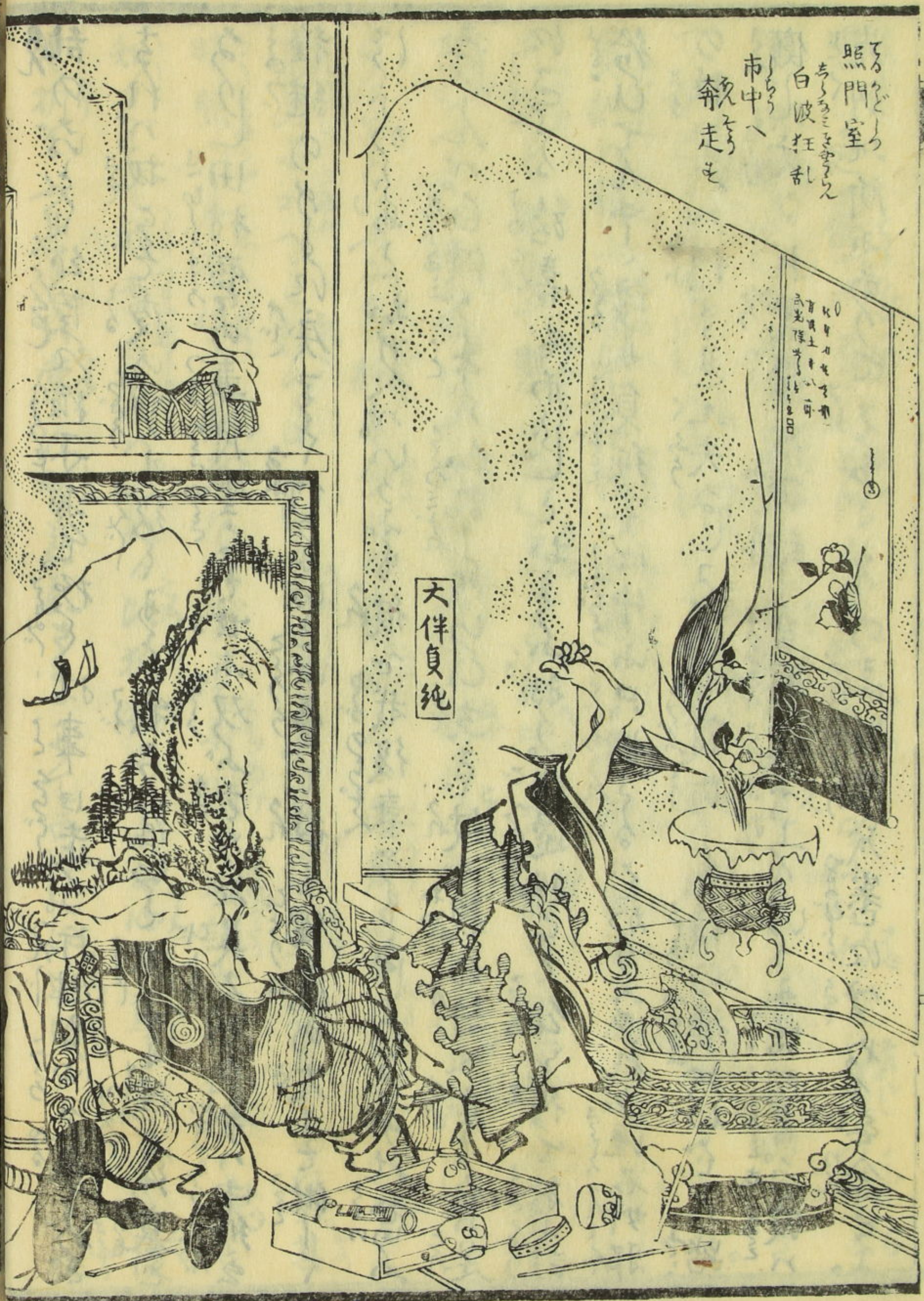
憑けしは照門を尋ね。如何事も二三力のりゆし。侍ら某が家人ホ
 へも得言じて用立系とせん折社節お返し多し。傍なる禰尾と
 て半已が身をばし入る件令成望の如く取揃と渡しちる。正
 貞純の領お救ひしを悦び押戴く。幾度謝言お伸る。照門の
 打笑き断りて懇よる。こゝろ中よる。聊のりおかく殷懃の
 言をつくし。あや。はて我も少しくおあり。いづれ世話し。あ
 らんやといふ。貞純を今のころ。嫁とよ免角あも及ぶ。しひ
 某お叶へる。夜のみ。いふ成事あてもはし。あせん。とあれ。其
 時照門声を低し。御足なればこそ打明て物語なれ。御辺も兼
 知る。く我妻白波の。いねる。以。狐狸の。あ。心。奪。は。し。が。その。後
 も折し。あ。と。く。の。常。に。替。と。と。ま。あ。て。あり。し。に。近。頃。ハ。又。時。く。狂

乱のふと。公。若。れ。松。子。あ。て。扱。れ。車。口。走。り。斤。附。も。心。の。免。り。が。と
 ちれば。扱。を。夜。の。契。も。後。く。あ。く。我。う。狂。い。と。淋。と。母。往。ら。後。寡。と
 る。り。し。田。村。磨。の。妻。月。雪。こ。そ。世。お。双。お。方。か。れ。美。人。か。り。今。ハ。中。納。ま
 種。継。の。り。の。戻。り。く。何。う。再。いと。心。憂。く。彼。も。獨。居。の。元。と。淋。く
 け。か。ら。あ。と。お。り。人。が。い。う。あ。も。彼。を。我。後。妻。と。も。は。し。ぬ。る。り。れ。替。あ
 る。ん。が。白。波。が。車。の。公。乱。れ。い。ひ。ま。る。彼。が。親。の。許。へ。戻。り。あ。足
 け。さ。る。泣。喜。と。あ。じ。と。お。さ。ふ。お。り。以。邊。此。こ。も。公。を。得。て。終。計
 給。ひ。て。ん。中。と。語。お。貞。純。と。心。中。お。只。憫。と。る。む。か。り。あ。れ。が。流。石。奸。邪
 の。性。な。れ。が。何。も。ま。さ。と。工。夫。な。し。と。肯。折。し。も。後。の。禰。尾。か。と。踏
 働。し。丈。あ。れ。黒。髪。が。振。乱。し。目。眸。逆。お。上。り。い。う。再。照。門。君。白。波。ハ
 先。刺。此。所。お。あり。て。先。さ。い。よ。りの。思。物。語。が。審。に。せ。ぬ。る。念。念。よ。

照門室
白波狂乱
市中へ
奔走

此の物語は
白波の物語
に
なす

大伴貞純



弓木照門

いづく夫婦の情を露も知らざるやと云も終つど照門お控かれを
 照門怒り又も物お狂ぬるゝと刀の鞘ぐらと打拂りんとせし如何は
 さん靴の遥お飛ぶ。白又忽白波が乳の下斜お切込む。血汐流て
 かつ紅白波の狂ひ回して裾引裏外面の方へ欠お進ばそれ進止
 よと照門貞純左右へ走りて呼れお白波の花がぶとくは市中にて
 欠おしと怖れ声音あそ。照門刑部と謀計を合せ貞純高貫
 瓜荷擔延壽石のうめお苅田磨を奔れりも其謀計を殘
 なくはえして市中お吟ひ回ぬ。市中人の山をまじ是を笑るもの
 ども眉お擧げられお彼女こそ手負と物狂じたお松くのこと
 は走めおあんなづきと是則神佛の人をて言あめま惡逆の報ひ
 るら杯はくは喧照門の家人を追馳りて漸と白波をとり

押おれお波の脱血後と。いと苦家お一声高く机の吼声してその仔
 島と怨おちり。是は入を照門にじめ悲歡さ夫と懇お取あかひ
 貞純の暇を告ぐ添らんとせし。大伴高貫忙あ入めりて照門貞純
 を物陰お招き大息次て言われ兼く我に計し延壽石を以
 苅田磨父子お奔りぬ。必何とてう近頃藤原の是公郷
 へ未女細を告し者あつしあて是公より潜お風笑おせし
 折る。先刻白波の手狂氣の餘りとい云おが。市中あは
 走りあはれを足公御の家長等得てことお元符合せりとく。
 速くも告しあや其未女とい知されも。我に三人を速お召捕へ
 身おびしとて。只今是公郷より此所へも人教を向られしは。我
 小吉者ありしゆゑ大お召召猶虚實お窺よ。實もはしお遠を

我三人を召捕んと大勢勇れよ。我賊と見留まりぬ。斯なる人我ホ言逃るとも及びて終命以失めよ。至る人をうろくとし居べ所不あり。いざ何方へなりとも共不れと強し折を計り又是公をいれ我ホが妨成へ人我討まば終めを兼くの大望成就して天下我ホが掌に入んは當りてハ走上策とされ外子候もよし。其半以語りも敢も。や捕手の大勢あり。照門貞純驚と怒と取ものも取めん。日のをせられを幸ふ。高貫諸とも夜不紛と足不任せと逃し。いざことも形く逃失り。斯て捕手の大勢入りて此西彼所を求る。更照門ハ入へど館の騒ハ鼎の沸ぐごとく。老若男は逃迷つて哭叫を捕手の人制。曰汝等騒るな。れ弓木照門

大伴貞純同高貫二人。是公御向りせよ。子細あれ。我打向ひし。汝ホ罪なし。早く二人が行清を告よ。若偽りて隠し置。其罪汝ホせども。適はし。死と声くに呼れ。誰あつて答る者も。形られ捕手の面々大に怒。中も賢げなる四五人の家。嚴く責問。若痛耐して思。言出され。嚮不。大伴貞純あり。四方八方の物語ありし。白波の狂氣して照門の又小死。今又大伴高貫ありて。何中ん密に二人語り合忙しく。取物もあ。ど。家人と見。是。此騒。終。何方へ走り。法。残。かく皆一同。み。捕。へ。齒の根も合。首尾を説。終。扱。我。ホ。打。向。を。早。も。悟。り。て。逃。失。り。た。あ。は。是。非。し。照。門。が。家。財。も。道。る。は。貯。け。は。令。浪。宝。貨。山。の。あ。り。て。あ。り。て。あ。り。て。

倉廩皆封し廟所となりぬるこそ悪業の酬ひ速なるも豈天
命なすべや然るも照門がつまぐ家入ますか秘置し小なる匣の
かりしれが袋重ゆめ封じ込め上照門自筆紙以て金藤と記
服ふ不許他見とのりしれ捕多の人と争て是を用くとせが一人
か之らゝ是こそ其信由持ゆりて是公郷お捧べし我を謾お用ん
へ倉卒の至るゝんとりへ皆尤なりと是も同しれ秘置照門の家内
一人も出入許さざと厳く番をつけおと夫より件の匣紙納て立
ゆり是公郷おのりしゆりもせへあげて彼匣とたれは是公郷とた
用と見えぬあふその後猿や早良太子の御筆紙で照門自純高貫ホ
いりゆり討を廻し坂上父子を失ひ其外障ともなるべし忠我の人々
を不追く罪お流しと遠ざけ早く天下成ありぬとて成勢したん

あは恩賞の面し望めぬとて。名も角おも刑部太郎が謀討を
憑珍ゆりの密命の御書なりけしは是公郷舌紙巻く眉と鬚
も入其信ふ又封をなし御心お慮らせまゆりて更お他んと許
洽りどが所お自純高貫の館よ向つれ人も皆ゆりゆりて
ける。我れ彼知よ打向ひ彼ホの家賊をも皆討じおれ人々出入紙
免さざ此上の下知を待侍る形りと告奉るに。是公郷一とせし
とて。夫より件のゆりも及び太子の御筆紙で流しもろく天白玉お
密に奏聞ししひけしは。天皇大お驚くせぬ。且逆鱗在
て則是公を以て早良太子を責問すぬ。怪なる證あれ上の
固辞しすの御この乗も邪。終お刑部太郎が討し後照門
自純高貫ホと示し合せ。延壽石を以て新田磨紙宛お

為しあひしる。比盡告あひて罪あ伏しあひしる。若くはあふ
月御雲客竊み種くと評儀ありて。早良太子御病のはしあ
まして。東宮を廢しあひ。一室あ永く押込せり。是是非もな
れ。みぢもなり。されば至尊の御方あも自作あ。藤原の治ああ
能き。思へよこの極なり。將照門。貞純高貫の館の皆取拂
つせ。家人ホの御答の沙汰なり。仁意の深りけよ。皆之ひく
み離散せしとぞ。去りてに。當今の御子。安殿親王を太子と定
め。後み平城の天皇とす。なり。是れハ此一件の治
ぬと。し。照門刑部太郎。首領人を始め。貞純高貫等。此行
諸草と。分ても。貪議る。と。是公へ勅命下。諸國へその觸
ありて。嚴重あ。尋す。求させ。あ。又彼延壽石。如何

はしぬると人をして。早良太子へ尋問せ。あ。不嚮。あ。浮説
ありて。件の悪事。れ。顯り。や。と。日夜太子の御公。安。は
終。あ。手。が。あ。も。成。べ。と。石。な。れ。は。と。既。あ。照門。み。仰。て。打。碎
す。丙丁。あ。ひ。し。と。ぞ。い。と。あ。さ。と。ろ。ね。り。し。沖。り。お。り。た。れ。斯。く。天皇
ハ。數度。後悔。し。あ。ひ。中。あ。も。良臣。新田。磨。を。失。ひ。新田。磨。を。流
罪。は。彼。が。家。を。亡。せ。し。り。を。淫。く。も。歎。く。せ。あ。ひ。速。小。田。村。磨。を。召。返
あ。り。ん。との。御。り。あ。り。し。是。公。い。て。曰。敷。慮。淺。く。は。れ。御。り。の
こと。の。葉。も。伸。び。し。と。れ。あ。も。新田。磨。も。容易。は。茶。石。を。捧。し。其
罪。な。れ。あ。の。は。殊。は。一。度。勅。命。下。り。今。又。將。に。く。赦。免。あ。ん
も。其。宣。は。あ。の。次。臣。が。愚。意。以。て。考。る。時。を。待。て。田。村。磨
あ。一。ツ。の。功。を。立。と。と。べ。り。期。は。至。り。て。召。返。爵。禄。を。授。擧。用。あ。ん。

坂上家再栄。世のまはも障なく。御仁慈も涉さしにわらば公
が残さずと奏聞。しるは天皇龍顔ことに美志く。実汝の中
とらう。其理不當なり。尤わら如何。おも付まらば汝宜きに牛
らひ努懃るの如くと密命あり。されど有難。是ふよりて是公
ハ謹く御請りて退朝。しるはいとぞ。

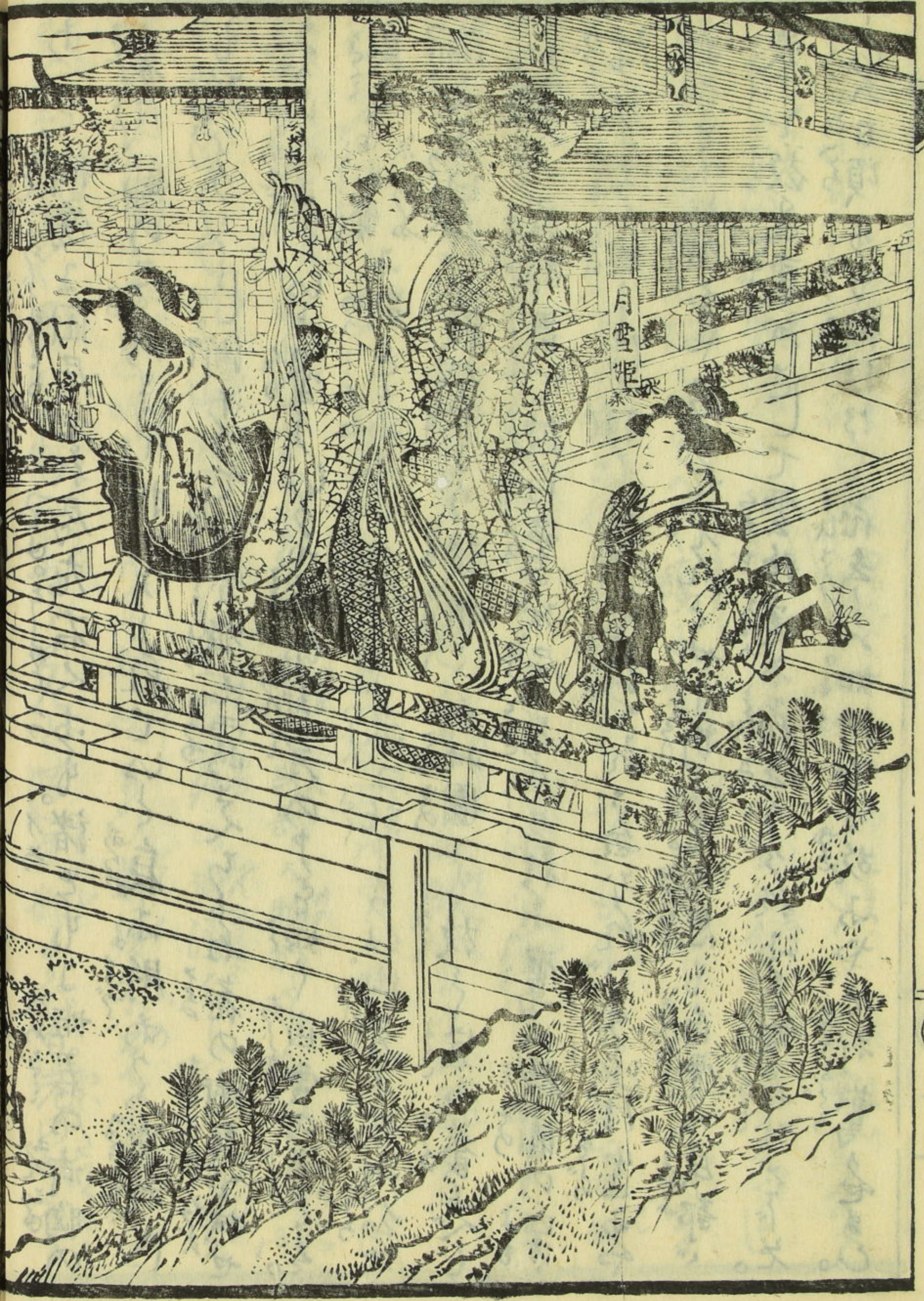
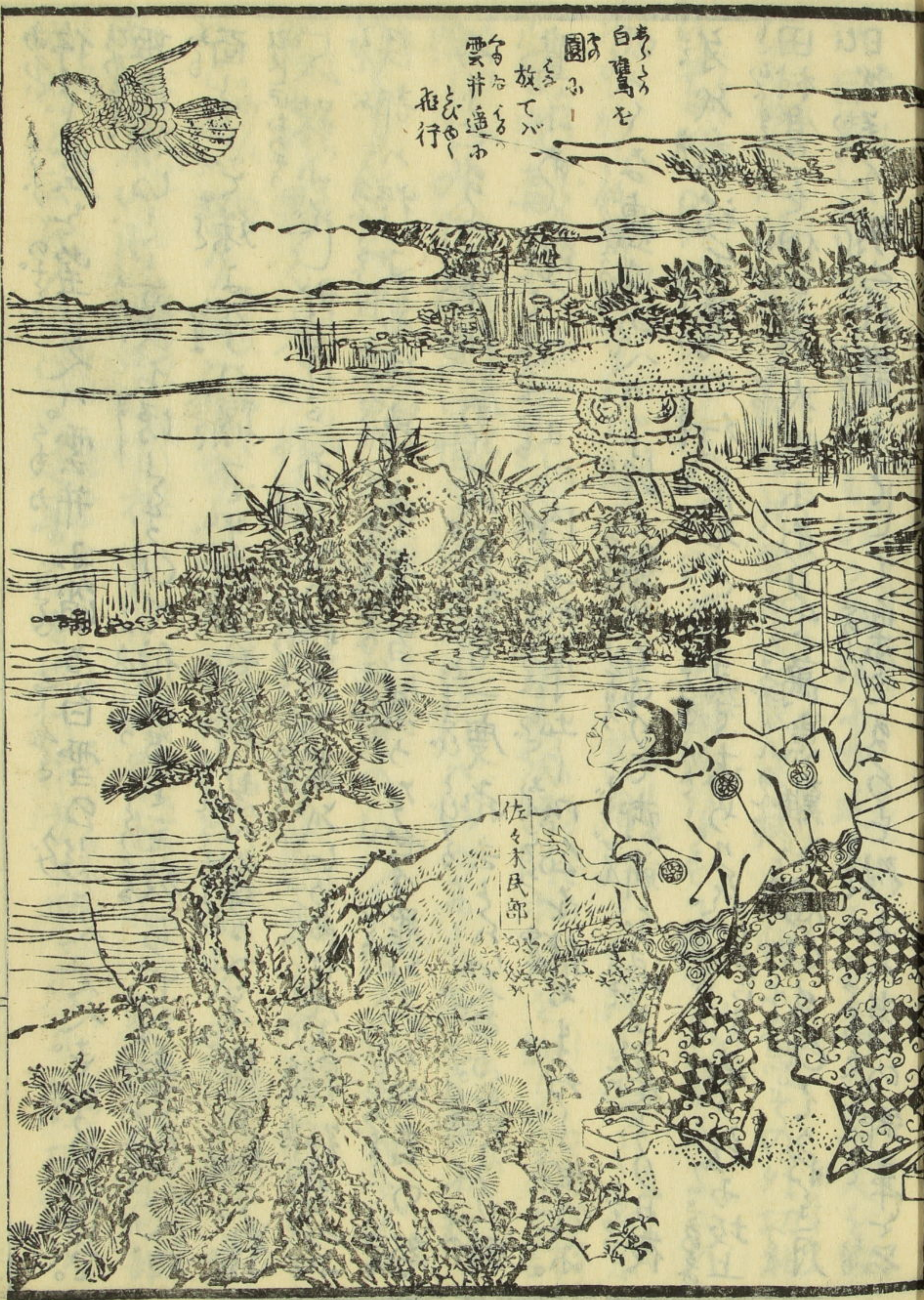
第八回 白鷹の便

去後。田村鷹の老臣佐々木民部忠順ハ忠義の心歎く。往來。
田村鷹流罪より。せり。初別。臨て託し。まら尊命。此重さ。小
小月。と。新田鷹の遺骸を厚く葬り。奉り。公。公。月。雪。姫。を。守。
護。して。中納言種継卿の力。と。に。憂。歲月。送。り。多。日。月。送。
小。移。り。く。白。駒。の。隙。過。か。く。早。く。も。延。曆。九。一。年。の。春。二。月。と。を。成。

ア。これ。が。民。部。ハ。月。雪。姫。の。御。前。小。お。く。憂。を。慰。む。な。り。居。る。小。未。
遠。山。ハ。雪。さ。ぐ。霞。の。空。小。お。き。の。登。り。も。麗。小。逢。咲。の。梅。も。散。切。て。
漸。春。の。文。行。を。姫。君。と。共。く。打。詠。居。る。折。ゆ。雪。井。を。糸。あ。そ。ふ。
老。の。翼。を。翻。して。落。し。ま。り。地。上。小。あ。り。り。れ。何。ゆ。人。餌。を。啄。ん。
と。て。か。ひ。抓。こ。又。蒼。天。小。登。る。成。こ。ま。の。梢。小。羽。を。休。り。居。る。れ。老。
も。二。つ。つ。も。小。乃。木。と。放。と。花。廻。り。て。食。を。争。ひ。南。小。翔。北。は。羽。打。
て。糸。拵。か。あ。ぞ。民。部。ハ。不。図。白。雪。拜。領。白。の。り。次。必。ひ。生。け。り。を。泪。
を。浮。め。姫。君。は。向。ひ。チ。タ。れ。ハ。御。覽。み。く。件。の。老。ハ。宇。内。子。羽。
成。の。し。て。已。が。さ。ま。ぐ。戲。と。拵。ひ。は。姫。君。の。近。曾。より。預。り。し。る。れ。
白。雪。ハ。黍。さ。り。も。天。白。玉。の。御。手。小。居。ら。れ。て。御。持。り。も。具。し。し。る。ひ。
は。秘。藏。あり。し。が。我。君。を。り。の。承。受。し。し。り。て。後。も。亡。君。を。り。の。

災ふ達多ふれ刻御衣を控て膝その凶と告ぢたり。是食鳥もが
 らもさるしづく。憐れむこの至るなれ。今唯小食とあつる。さほ
 て。後々郊原ふ放るもみく。纏ゆ余に繫ゆてなれ。嗚呼時を
 かき名をとりしども廢られり。件の孝あども及びて去あても御
 家盛なる耐なりせむ。白雪もどもその徳澤を荷ひて煥るるに
 あ。ゆふたなきと浮世なり。なれあぞと。忠信の誠心より。是あはこ
 彼あつけ。さひ回らし。嘆息なり。けしむ。姫君のさうで。こに。み兼月
 憂を耐え兼あふる。あ。まわく。今の民部が物がらう。い。と。胸
 もせむ。し。して。何と御答もな。玉散る。の御涙。ら。く。と。膝の
 づ。こ。痛り。流。と。叫とむ。ろ。ふ。打。仗。多。ひ。前後。不。足。ふ。歎。う。せ
 ら。ふ。ぞ。痛。く。兼。て。の。慰。め。あ。は。せん。と。せ。民部。も。ども。老。の。杖。を。手

あ。こ。御傍。に。回。居。せ。れ。局。左。右。人。あ。も。諸。も。も。姫。君。の。御。胸。の
 裏。民。部。の。こ。ろ。流。ま。を。押。さ。う。ら。れ。て。いと。良。小。時。あ。ら。ふ。哭。腫。せ
 も。断。なり。ま。じ。し。漸。あ。り。て。月。雪。姫。と。露。え。ら。れ。ね。花。の。御。顔。を。拭。せ
 ら。ぐ。ら。の。声。も。いと。曇。り。い。う。ふ。民。部。御。身。の。り。と。如。く。白。雪。の。こ。と。と。
 良。人。田。村。賢。小。別。と。ふ。ふ。と。折。う。ら。安。し。託。し。あ。ひ。御。身。と。共。小。公。次
 附。よ。と。曰。れ。な。れ。べ。今。より。後。折。く。ら。此。園。へ。も。放。く。宜。小。養。老。之。し
 と。宣。へ。民。部。畏。て。彼。白。雪。次。居。あ。り。ら。れ。小。鷹。の。御。園。の。四。方
 除。け。く。ん。廻。し。け。り。羽。を。た。れ。て。散。れ。ぬ。さ。ぬ。な。れ。ば。さ。う。は。雀。あ。や
 あ。り。と。べ。れ。雀。を。や。さ。う。せ。ん。と。せ。し。折。し。も。不。思。も。白。雪。に。民。部。が
 美。手。を。故。と。東。次。に。して。雲。路。遙。小。花。去。り。ら。れ。あ。ぞ。姫。君。次。と。ト。え。
 さい。日。頃。あ。も。似。げ。ね。く。花。去。し。へ。如何。なる。故。あ。や。と。打。驚。く。せ。ま。ひ。



作^ありて空^{そら}を望^{のぞ}み人の雲井^{くも}消^きる白雪^{しらゆき}の影^{かげ}入^いるもなかりおけを
 姫^{ひめ}君^{きみ}のいと憂^{うれ}を坊^{やう}とまひて彼^あをを放^{はな}らしての妻^{つま}良^よ人^{ひと}への
 面^{おも}とど。珠^{たま}よ今^{いま}の隔^へ了^りすのせ。しん見^みへちめづき期^ごも知^しらば
 一^{ひと}入^い疎^そおじしなせしとありて此^この罪^{つみ}はいふせんと打^{うち}歎^{なげ}あふ
 民^{たみ}部^ぶの怪^{あや}文^{ふみ}も迷^ま惑^ごして足^こ皆^{みな}某^ながなせる罪^{つみ}なれば姫^{ひめ}君^{きみ}の努^{ゆめ}
 ありせもの事^{こと}はあづむ。されども一度^{ひと}飛^と去^ひとふごもえより野^の
 鷹^とおあつ後^ごは五^ご七^{しち}日^{にち}の内^{うち}あり尋^{たづ}ね出^でぬを休^{やす}めまわらせんふ
 ぬくくる慮^{おぼ}えあべうと慰^{なぐさ}めちりて御^ご前^{ぜん}を退^ひき是^これより日^あ夜^や
 牙^か委^あ秘^ひて鷹^との行^ゆ歩^ほをこそ尋^{たづ}ね求^{もと}められ是^これよりあつお坂^{さか}上^の
 田^で村^{むら}磨^らを伊^い豆^{まめ}の大^お嶋^{じま}おありて萬^ま患^あ難^{がた}を忍^{しの}び多^おひ。とう好^{この}き月^{つき}
 日^ひが送^{おく}り明^あられ鬱^{ふさ}くとして樂^{たの}しむるごとと附^つあ考^あの御^ご事^{こと}と
 以^も回^からしまのまはけけも。いふ成^{なり}謂^いあ延^{えん}壽^{じゆ}石^{いし}お毒^{どく}ありて人^{ひと}を毀^こ
 ひしやん。彼^あ茶^{ちや}るは既^{すで}お月^{つき}雪^{ゆき}姫^{ひめ}の長^{なが}を病^{やま}え頓^{とん}お愈^ゆ。その外^あ功^{こう}能^{のう}
 のそるもの数^{かず}多^{おほ}あれと人の身^みお害^{がい}なるとその不^ふ審^{しん}とよ。これ
 どもかれ奇^き石^{いし}なれば却^{かえ}て若^{わか}くは其^{その}用^{もち}れとら後^ごお奇^きと良^よ茶^{ちや}
 とも成^{なり}毒^{どく}茶^{ちや}もなれるゆれ有^ありて照^{てう}門^{もん}お足^{あし}を知^しりて幸^{さい}と計^{けい}
 設^{たて}しその後^ご。遮^さ莫^{もく}口^{くち}惜^{おぼ}と次^{つぎ}身^みなれば。いふおも敵^{たて}を審^{しん}お知^しり
 けつらん。此^こも家^{いへ}お考^あへて此^このいつを限^{かぎ}りとも知^しらば此^こ
 鴛^う小^こ朽^く果^{くわ}も考^あの修^{しゆ}羅^らの妄^ま執^{しつ}をなすし奉^{ほう}らて過^{あや}れをえや
 りと或^{ある}ハ怒^{いか}り或^{ある}ハ悲^{かな}し。関^{せき}正^{せい}市^しハ御^ご傍^{ぼう}ありて同^{おな}く涙^{なみだ}は噎^{おど}
 て曰^い某^なの比^ひ世^よ代^{だい}作^{さく}方^{かた}ありし附^つ弓^{ゆみ}木^き照^{てう}門^{もん}ハ家^{いへ}臣^{しん}岩^い岸^{がし}刑^{けい}部^ぶ
 太郎^{たろう}と云^いれりの件^{けん}の延^{えん}壽^{じゆ}石^{いし}を世^よ代^{だい}作^{さく}方^{かた}は携^{たづ}ねあり。其^{その}功^{こう}能^{のう}は

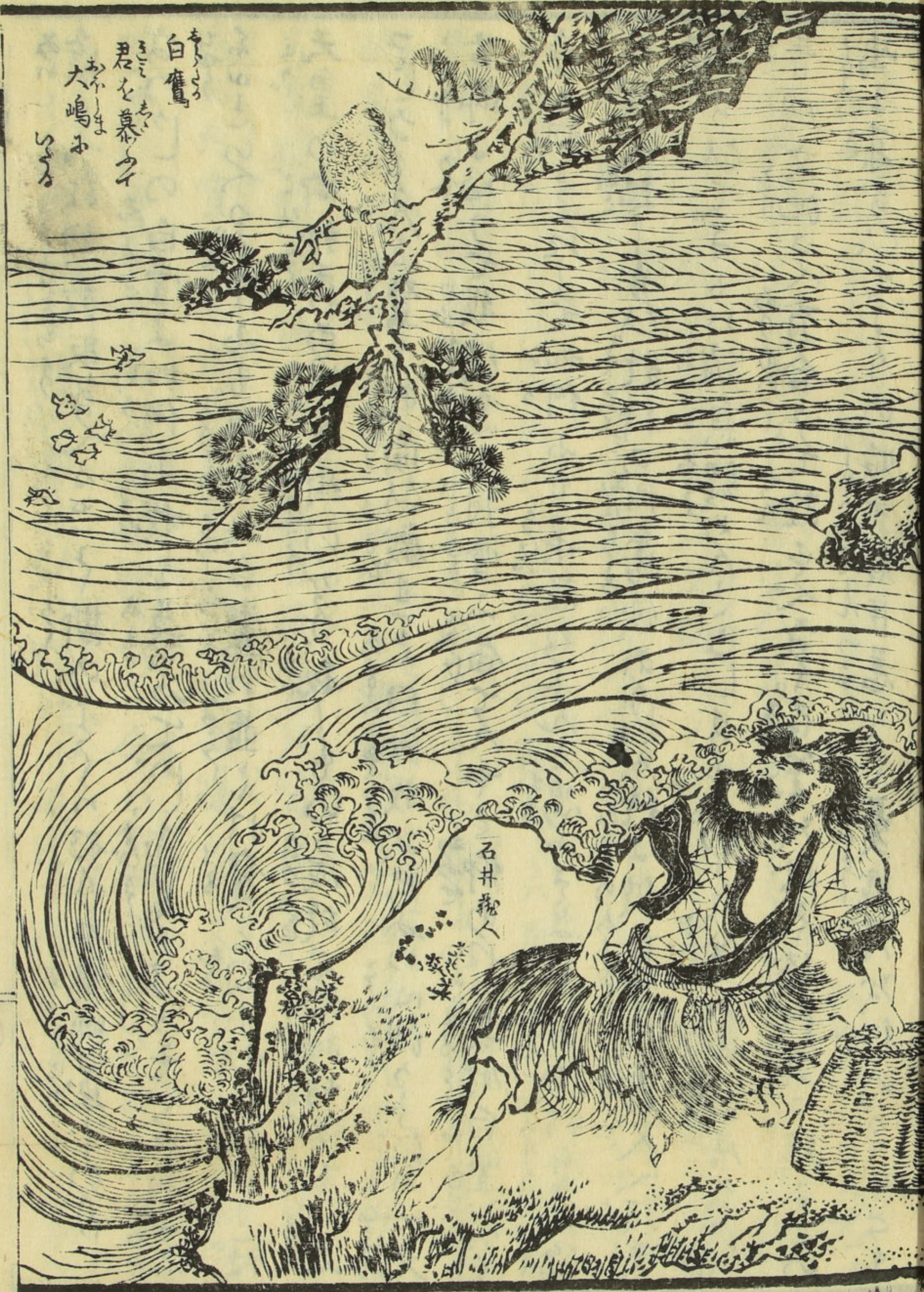
以^も回^からしまのまはけけも。いふ成^{なり}謂^いあ延^{えん}壽^{じゆ}石^{いし}お毒^{どく}ありて人^{ひと}を毀^こ
 ひしやん。彼^あ茶^{ちや}るは既^{すで}お月^{つき}雪^{ゆき}姫^{ひめ}の長^{なが}を病^{やま}え頓^{とん}お愈^ゆ。その外^あ功^{こう}能^{のう}
 のそるもの数^{かず}多^{おほ}あれと人の身^みお害^{がい}なるとその不^ふ審^{しん}とよ。これ
 どもかれ奇^き石^{いし}なれば却^{かえ}て若^{わか}くは其^{その}用^{もち}れとら後^ごお奇^きと良^よ茶^{ちや}
 とも成^{なり}毒^{どく}茶^{ちや}もなれるゆれ有^ありて照^{てう}門^{もん}お足^{あし}を知^しりて幸^{さい}と計^{けい}
 設^{たて}しその後^ご。遮^さ莫^{もく}口^{くち}惜^{おぼ}と次^{つぎ}身^みなれば。いふおも敵^{たて}を審^{しん}お知^しり
 けつらん。此^こも家^{いへ}お考^あへて此^このいつを限^{かぎ}りとも知^しらば此^こ
 鴛^う小^こ朽^く果^{くわ}も考^あの修^{しゆ}羅^らの妄^ま執^{しつ}をなすし奉^{ほう}らて過^{あや}れをえや
 りと或^{ある}ハ怒^{いか}り或^{ある}ハ悲^{かな}し。関^{せき}正^{せい}市^しハ御^ご傍^{ぼう}ありて同^{おな}く涙^{なみだ}は噎^{おど}
 て曰^い某^なの比^ひ世^よ代^{だい}作^{さく}方^{かた}ありし附^つ弓^{ゆみ}木^き照^{てう}門^{もん}ハ家^{いへ}臣^{しん}岩^い岸^{がし}刑^{けい}部^ぶ
 太郎^{たろう}と云^いれりの件^{けん}の延^{えん}壽^{じゆ}石^{いし}を世^よ代^{だい}作^{さく}方^{かた}は携^{たづ}ねあり。其^{その}功^{こう}能^{のう}は

仲て世代は賣あへて折る。物の隙より窺ふる。その悪相
凡人もふ。是心曲者なり。先九分ハ察し候。然れ。然れ。行
経く照門より。彼某石死。君不薦。まわ。せ。然して。後災の到
了。これを考へ。と。ば。弓木照門。岩岸刑部。太郎。こそ。正しく。敵
めと存さふ。へ。む。い。く。も。君。此。嶋。を。道。と。都。小。志。の。ひ。登。り。て。彼。亦。が
有。候。を。暗。み。弘。一。も。ひ。さ。バ。終。り。其。審。り。る。子。知。得。へ。さ。ふ。い。つ。も。て。此
嶋。あ。か。く。て。在。さ。ん。あ。の。君。の。本。意。は。遠。く。不。便。も。あ。ら。じ。志。し。願。ハ
供奉。は。して。粉。骨。碎。骨。の。心。を。こ。し。度。く。人。間。を。尋。求。さ。る。な。ま。ご。ら
素。懐。は。遠。く。つ。が。に。御。奉。の。い。へ。ね。古。人。も。い。れ。り。あり。陽。氣。所。発
金石。亦。透。精。神。一。到。何。事。不。成。と。兼。り。候。へ。ば。ご。く。思。召。ま。さ。ひ
く。此。嶋。を。人。知。ら。ば。道。も。多。し。少。く。義。を。捨。て。大。功。成。ま。さ。る。ま。ふ

こそ。大丈夫と謂つぞし。君事懐を達し。あの上。其も伏臥く。
暫時の御暇を。あつて。母妹の。離。を。忍。ん。あ。再。生。の。君。恩。此。上。や
ゆ。べ。れ。と。忠。孝。の。な。り。あ。我。を。忘。は。涙。流。し。て。竊。は。告。し。て。ま。う。た。ふ。
田村警。は。し。召。と。汝。が。中。以。所。余。も。邪。く。其。理。あり。と。い。ひ。ご。も。ご。
ら。く。其。宜。ふ。叶。は。じ。如。何。と。な。れ。バ。此。嶋。を。道。出。れ。易。き。と。も。
未。だ。と。治。定。一。教。も。あ。ら。て。都。の。地。あ。隠。忍。ん。あ。却。て。我。亦。を。ご。そ
尋。知。れ。て。私。は。嶋。を。去。り。て。法。を。侵。る。の。罪。を。蒙。ら。ば。其。討。ち。万
ら。ゆ。る。も。及。び。ご。況。や。警。復。さ。れ。の。違。あ。ら。ん。や。され。バ。い。く。あ。も
良。策。以。回。し。正。しく。敵。を。知。り。入。り。其。討。ち。ご。そ。汝。が。中。以。如。く。小。我。は
捨。て。此。嶋。を。道。出。將。お。志。願。を。遂。へ。さ。ら。幾。の。罪。を。受。る。も。死。心。と
あ。ら。ん。夫。々。の。大。切。の。命。を。未。天。命。至。ら。ざ。れ。バ。如。何。と。も。詮。さ。ん

る。只よ心を盡し志懈さんば。いふ神仏の憐れんや去る
 も此歲月衣の赦と果礫邊の却。こは龍寒猶肌ふ對へ飢ふ
 たも忍びる。とる漢の業と入近頃。然て奥に得ざれど。身
 養つてゆたふをうねく。辛じて其日か過る所已なるも。宿世の成
 報もやと暫時御言も終る。御顔の。いり。瘦果もまひ。我も
 おどろふ浦風。乱れ君臣とも。塵埃もまをれ。たなぐ。我も
 人とも分が。た有まこそ。足非もなれり。ちれ。た。とも
 正市。共人臣のれを失つて。日夜を捨。仕。但見
 眼前。野雀群集。木立の茂。道。軒端。羽風。對。目前の松
 が。何。故。や。と。田村。鷹。打。玉。多。羽。風。對。對。目前の松
 の。枯。枝。白。一。羽。花。も。田村。鷹。は。終。て。人。雨

を顧まひ。あれ。看。ま。白の鷹。の。世。も。稀。な。れ。が。こ。そ。人。皆。これ。以
 愛。られ。い。り。丸。珍。り。ま。る。事。も。非。や。是。を。入。る。附。て。も。は。街。狩
 の。耐。天皇。より。給。り。白。雪。も。今。の。め。行。り。ぬ。り。や。な。ど。侍。り。熟
 打。詠。ま。る。多。人。食。指。を。以。指。に。して。件。の。事。は。足。次。御
 覽。の。れ。足。草。つ。て。あ。の。野。を。何。地。より。放。と。ぬ。れ
 あり。んと。云。も。終。ら。ざ。り。に。白。鷹。の。松。の。乃。木。に。た。り。て。田。村。鷹。の。伊
 前。よ。飛。ま。れ。ば。山。拳。次。の。ま。ま。小。虫。は。御。拳。の。上。の。羽。を。休。め。只。管。は
 顔。を。う。ら。親。友。翼。を。屢。羽。打。ち。暮。ひ。と。す。れ。ま。り。お。田。村。鷹
 と。と。え。り。み。音。御。覽。せ。ら。れ。て。忽。驚。ひ。て。日。何。そ。と。う。ん。是。平。に
 我。白。雪。たり。如。何。と。な。れ。ば。此。鳥。の。恰。好。羽。の。締。と。い。ひ。社。も。似。と。れ
 而已。果。して。證。と。す。べ。れ。と。中。の。爪。一。折。れ。の。鷹。お。父。上。の。災。お



白鷹
君を慕ふ
大鳴也
いさ

石井権人

石井権人



田村麻呂

國正布

田村麻呂

逢ふに刻放取多るこそ斯のどくおりぬ嗚呼悲しかりし
 ありしの白雪よ如何お我を莫あてがし飛鳥もるもそも飛鳥と名
 をとりつるが中も取ふ此白鷹の並くは鷹と同じかふはさるば
 天皇の御秘符めりも御改なり叔もい成故あや此崎までハ基
 了しまふんと鷹は打向ひ戯れと日汝我れあふの心浅くはハ一先
 古郷はゆりて我消息を月雪ふ届てんやと仰めれハ其付白雪の心
 度が羽とれして如何も美話ゆふんと思ふさまなれば田村鷹ハ流
 も感心起しあひ教行の心落涙ありしが終は彼白雪ハ飛人へ須更
 預めひてさふハ消息認めんとはしまあかハ貧れ御住居なれば
 音烟文池と有合とて詮とてま石等ハ以て怪げあつ紙小この
 鳴よまらひてよりの始末君臣恙なく憂歲月ハ経ぬるこそぞも

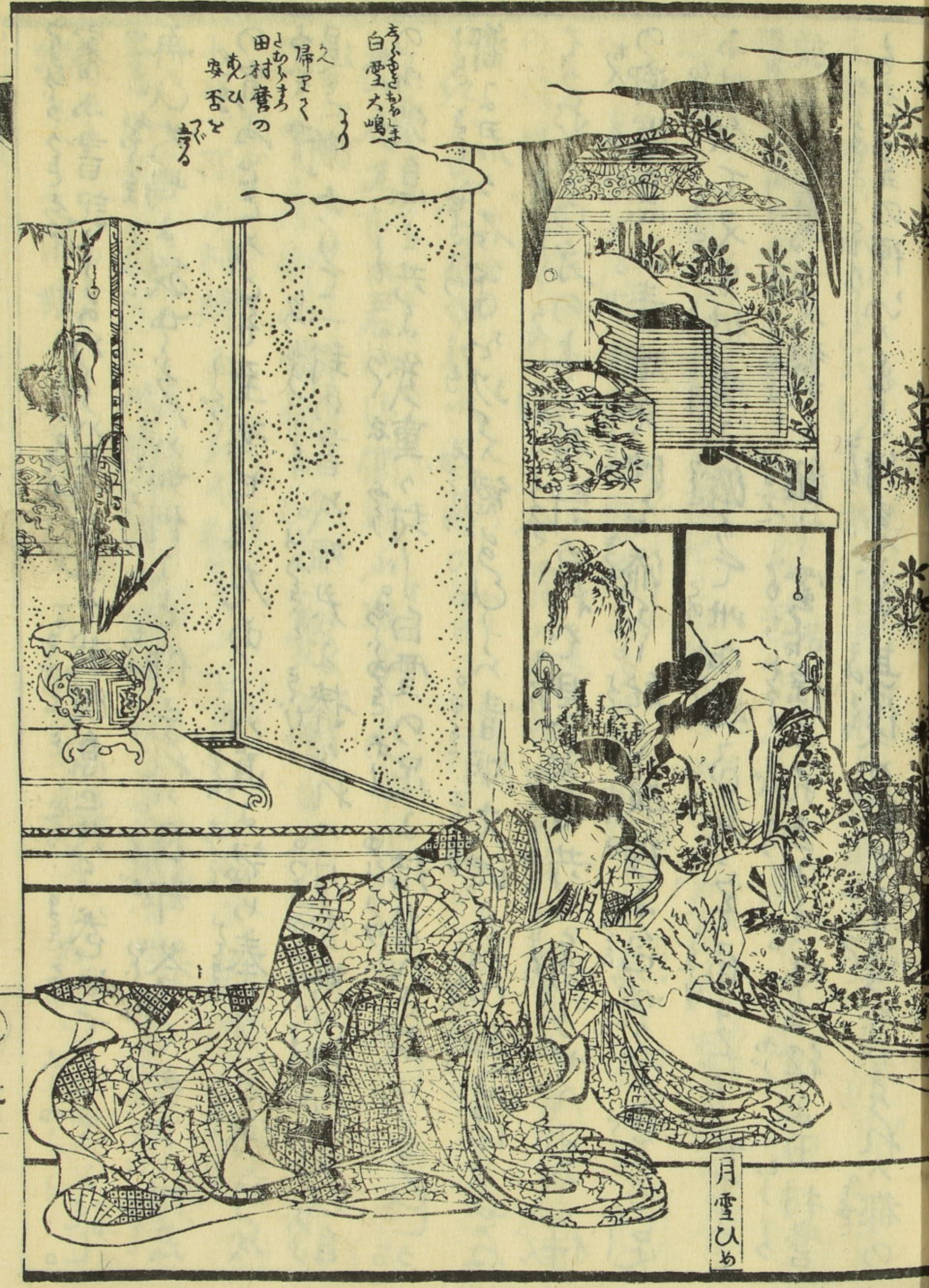
巨細小記とすハ又都の松子も其委れをまほしくなるとは公の
 たけハ細くと落もなく書すハ足をくくると巻て其上ハ浅袖の
 敵を引ちらうて艱中包み又紐以て文取堅く結び是を白雪
 の足と駿と結付扱しも鷹は向らせ人は對れがごとく仰ぐ此消息
 を都に居る月雪のめとに届よ返翰あふ再び見せし傳耳
 漢士ハ消息の使せ大もありしとや願よや白雪と宣ひて
 放めハ不測や白雪ハ忽空は翱翔して又西ハ望んで飛ゆと
 ちり。彼所ハ仇と木民部日夜手分心をか鷹の行儀ハ
 求め月雪姫も御心あふハ或ハ神ハ禱らせ又してハト筮も向
 せまじし人とも更ハ其甲斐あつ今ハ如何おまして欲宜らんぞ
 千と御心を煩らせまハ日頃信じまふハ観音の隠家と

取出し深も念じて御心は誓ひのふり往年良人別々に臨て天皇
より給りし白書は親心母妾母託しあり今こそ取放ぬれど
過とのりよとぞなれども良人の命は違ふゆゑ其後よ過ぬれど
若運拙く件の誓ひ行来尋ねるる叶ふまじく此月雪の命
存命ぶくも是れは良人大悲の恵あり頃白雪の行来
を知らざる人多と。身お替て一心他念なく伏拜するも娘の丹誠
爰お至るる歎又觀音の恵を浅くごりしや。依く木民部忙し
く山前よ出立手あり白雪は居立手をつらん跪き謀んでやがる
と只今某御館の口溝は添めて過るお折しは清おはと垂
るれ松柏の茂より件の白雪はあつて某がてお給ひ然る已
あつた足お何ぞ人附する物ゆれと足を改れどもなく。那君の

左こそ御心を好し多らんは速お車の子細をさへまわらせと。
悦びしゆちゆとんと杖を居たりぬと。笑を合て委細を伸るぞ。
月雪は唯よ酔の醒夢の破と。ゆゑて限る悦むせよ。これ
傷お御身が乃日の公盡の至る処といひ且を妾常お信させ
祝世音の恵よりて再び白雪の戻らるるの誓ま去あても足
お附し物こそ如何かと取上るもお見若びお垢附る白綾の裂
よ包なせれあり。打解て刺せえも。こゝろ計とも。燕しゆじと
暮りせよ。田村磨の御筆よて細くとの消息あり。これ一度
ハ驚きよ。悦び。宴優曇華のなる待得ぬ。夢うらうら
と先より御涙を忍びて。御手よ振へるを。涙と打く。く。續
終りよ。管角の御言の。只管御涙。噎多し。暫

ありて御宵を静めおろりの人を遠ざけられ如何小民部近き
て此御玉章の音是正しく我良人の御筆を包し服紗を
君が御衣の裂をぞあえんとあがれたるれば彼白雪ハ彼所まで
飛行し君が慕ひ奉の志を遂しや禽鳥とす斯のごとくおれお
偶人界お生れまゝ我身此鷹よ及ばざれば如何なれ過世の報よ
やと歎くせまふ小民部ハ力と附なりのやとあへ何条とるふのゆへ
れとも人力の及ばざれば則天命よ任なれば附の不運と聖と以
ても免とあるはたのち也此御回洛を細よしむて我君の心
を易かじりめり某頃日兼る岩岸刑部太郎の隠謀啓る
御謀叛のりし早良太子の御病のはしめて東宮を退きしむし得
照門刑部を始り貞純高貫等と是公卿より嚴く求め

よしなれど彼深く牙牙隠せしとぞ又照門が妻白波が狂乱の刻
市中ふ吟ひ歩行口走りて照門刑部亦討りのけ亡君を究よ活し
まふせしてそせめおそれバ借考合とれハ我君の雖と疑ふおもわく
ら木照門岩岸刑部太郎を始め貞純高貫亦もとれお組せらば
なれば是等の次第を我君よ告ふせてあえんま我君あられ
心志の母と兼と某と別々望と竊と仰りぬとハ終つ亡君
の鎌刀復とお附は達へ。免は角よりと御心を忍みひて時の
至を待たると眼中涙を流め忠信表は顕きて諫めんとされ
ハ月雪姫も其理よ心こぼ解さるは巨細を消息よ告ふは
るが我身女のふりなればいづれは筆をひくとも君り危あ
まふものあが詮なれば御身の見せしむるところを

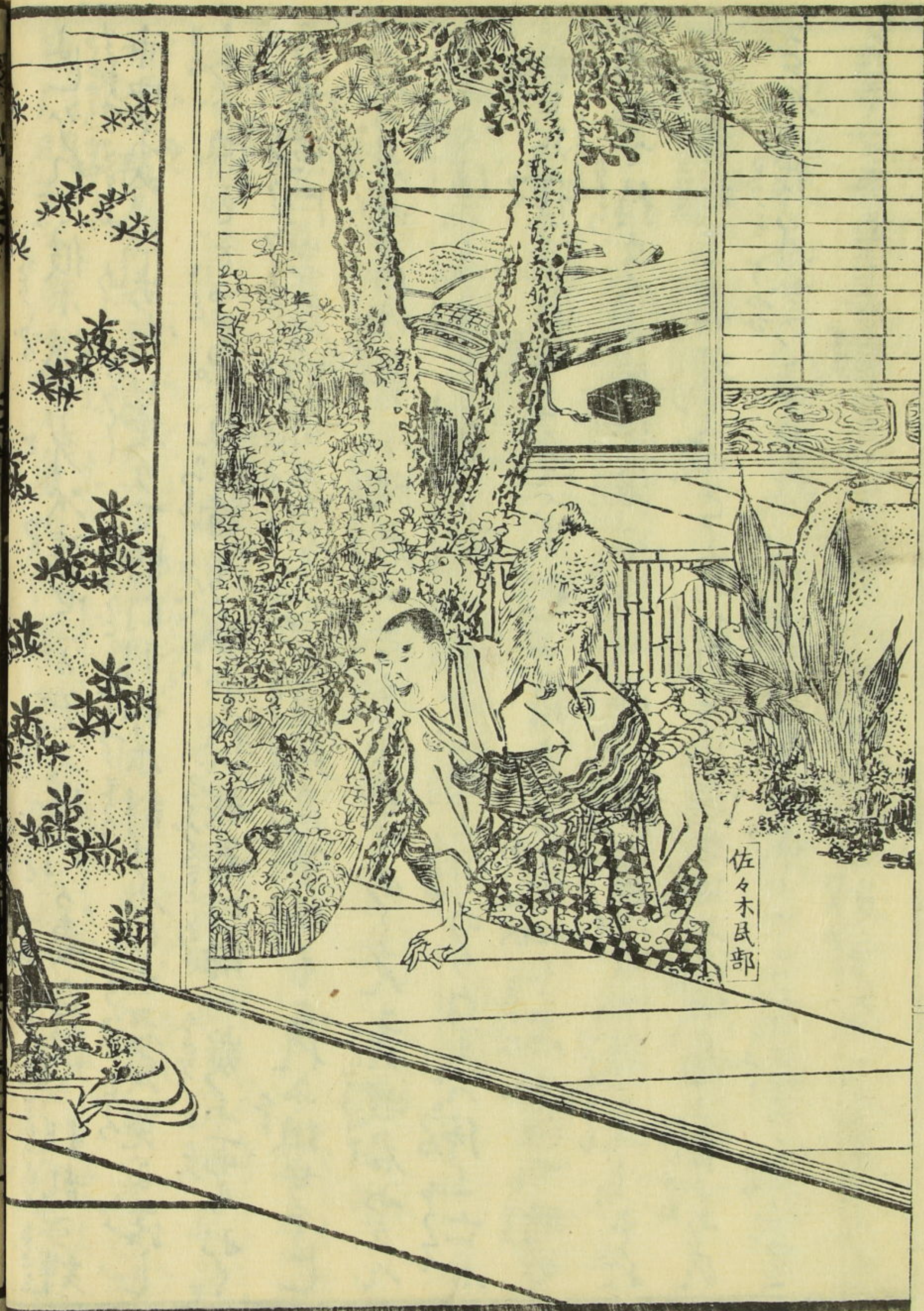


久
帰てく
田村
の
安否
を
尋
ね
る
白
雲
大
嶺

月
雲
入
り

日本書紀卷之四

七



佐
々
木
民
部

日本書紀卷之四

九

審み書記しつらふ夫をこそ我消息と共に巻込て白雪に託し
 再び大嶋は放ちらん如何にと仰されば民部答く密に姫君
 の宣ふところこそ至極せり。左の直は認め奉らんと御前
 退き漸おりに一封の書に姫君は捧ぐれ八月雪姫は泣き自
 の消息と共に。雲重く封じ白雪の足は結甘んとなしし
 嚮は君が存字を以て認めひひ青烟文池を人ひははうせぬ
 ころおの身の上と推計されは是をも共におもひせんあつと件
 の御消息は青烟文池を添え。新く服紗お包。あつて暮の足
 お結びて又も彼嶋は渡りて此に返りてはこそ届きかたせよと
 放ち人へ鷹は又翼を翻し雲路遙は飛去あつと。この細は田村磨
 と白雪の便いゆめと待た人も。其後の段で音信もかたられ都の

左右のみ知さむ。いつ我宿志を果さん期も知べうは然あむ
 譬松喬が壽を保とも何れせん。千々未方往未ともおひ出
 獨懶く孤燈は對して在せ。お我君は正市の君の御有ははをん
 心は喜びぞ。いづれゆして慰めあせん。とひも春の夜なれと初旬
 の月れ入まが打暗く。今宵の頃和煦なれば。四方の景色も氣
 せらりてえゆれぬ。波濤の音も終る。海の面いと穏かなむ
 人正市の君の御側近に進よりて中なれば。我君あり今日しも
 何とやらん御心惆悵といと憂を増すあところもえなれか。折
 ある一杯の村醪ふられを慰めあて可きらん。某亦君に陪して
 葉の舟は掉し。此嶋の滑み綱を投して鱗を得とらん。あ直小
 燐炙して酒媒もなまば。又これ時の一魚あつぬ。いざさくさく歩

哀そのまは痛ましむ。よくくえんば豈料人や。是則日夜暮
 せしむる白雪めてぞありけれ。田村磨と是と御覽して且駭と且
 悲とて宜く。誰うあつん白雪の。かかれまめてこの鳴小流とまへ
 とんと。端まう嘆息みしやぐて包れ同と。多人は月雪よりの一討乃
 消息と音烟丈池まを添れり。其時田村磨の御膝をそこと打
 く。扱も女の智の浅くうるは是非も戸し嚮よ我より送る消
 息よ石筆を以て書せし月雪の流くもその圖とや。この夢の
 件のあまを添こと日比の伶俐の似げることよ但某がみよ而
 已く流配正しより。既よ大事を誤るとせり。危くしあやう
 くと曰て彼あま雪穴御手よ居させ翼を授さるりえりあ暫し
 かはど海中お溺れりよとおびて。いと打惱められはなれば荒くお

向ひて汝ひく心を書し社に仁てよ。銀の仰られは若人畏
 きて。鷹が預りのすわらせ。日夜怠りくしこりしは日教経の
 終よ本お復しむれとぞ。きくも君の為よ心を盡し。かれ
 災お達ぬれば。天も憐を垂りて。不測お鷹の必死を免は
 せやと。女人毎お語りぬりことぞ。

田村物語卷之四

